

「2020年インドネシア大学スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学文学部・研究科1年 (氏名) 梶田美晴

本プログラムに参加して感じたのは、自分と違う経験をしてきた人と話すことがいかに大事で、貴重な体験かということである。また、2週間とはいえ慣れない土地で生活することで、自分の日常を振り返るきっかけともなった。

インドネシアで感じたのは、寛容さである。例えば、すぐ座ること。大学構内だけではなく、一大観光地であるモナスでもたくさんの人が地面に座り一休みをしているのを見て、驚いた。日本で道端に座ることはまずないので、その辺に座って一休みすることは新鮮で、また地元の人になった気分で楽しかった。特に街中で感じたのが、見知らぬ人ともすぐ打ち解け、また何かあれば注意してくれること。日本では知らない人が携帯を落としそうになっても、実際に注意する人はなかなかいないと思う。だから、インドネシアで、「携帯落ちそうになってるよ!」と指摘されたときはまず自分に話しかけられていたことにびっくりし、次にそれを教えてくれたことにびっくりした。また、電車が何かの不具合でなかなか進まなかったとき、前にいた若い女性と年配の女性が当たり前のようにお喋りしているのを見て、明らかに知り合いではなかったのにすごいなあと思った。このほかにも多くの日常の中のちょっとした場面で、いい意味で人の視線を気にしすぎない寛容さを感じた。

また、宗教についての寛容さも感じた。私は日本に暮らしていて、宗教を意識することがほとんどないこともあり、宗教=教えに厳しいものというイメージを勝手に抱いていた。しかし、実際インドネシア大学(UI)の学生のみなどと話し、宗教に対する姿勢は人それぞれだし、またお互いに、「それぞれ」の部分についてどうこう言うことはないのだと気づかされた。もちろん触れにくい話題だからというのものもあるが、私にとってはすごく意外だった。

こうした日本との違い、日本では感じられないことを感じられただけでも、インドネシアに行ってよかったと思う。また、そうしたことを感じる中で、何も考えずに普通に過ごしている日常も、他の人からすれば普通ではないかもしれないから、自分の生活基準でしか物事を考えられないにせよ、それを常識のように思いこんで話すのは大きな間違いであると感じた。自分と違う環境で育ってきた人と話すときに、このことに留意することで、相手の尊重につなげることができると思う。

また、UIの友達から受けた、日本語についての質問がどれも難しく、日本語を面白いと思った。それこそ普段は意識せずに話しているからあまり気づかないけれど、ひらがな一文字で全体のニュアンスを変えることができるのは、本当に難しいと同時に面白いと思う。日本語についてももう少し知ってみたいと思ったし、もう少し知っていたらもっと歯切れのよい解答ができたかもしれないとも思った。

インドネシアに行くことで、実際に行ってみないとわからないようなちょっとした違いが分かったし、その違いを知ることで自分の生活を振り返り、また普段の言動を見直す良い機会となった。また、日本の特性とまではいかないまでも、インドネシアと比較しての違いが分かった。今後、別の国に行ったとき、違う比較軸を見つけられたらと思う。